校長室から **ひがしなら通心**
（R元年度）　茨木市立東奈良小学校　川上　隆　No．４２
令和元年１１月６日（水）発行

東京2020オリンピックホストタウン アンバサダー成果発表会

１１／２（土）立命館大学茨木キャンパスで、東京 2020 オリンピックホストタウンアンバサダー成果発表会が行われました。市内小学生６人がホッケーのアンバサダー（大使）として、夏休みに東京の五輪ホッケー会場や日本ホッケー協会を視察し、その報告を壁新聞にまとめて発表してくれました。３年生の福井瑚音葉さんもアンバサダーの一人として、立派に発表してくれました。

（右の写真です。下は、スポーツ報知８／９（金）の記事より）

いばらきホストタウンデー

市内の小学生6人アンバサダー就任

鳥居櫂里くん

平松諒大くん

金子優菜さん

福井瑚音葉さん

安原朱優くん

田中心梨さん

東京へ派遣 五輪ホッケー会場や協会など視察

茨木市を代表する応援大使であるアンバサダーの任命式が、ホストタウンデーの市民交流イベントとして行われ、同市内の小学生6人が任命された。子供ながらホストタウンのPRと伝達の重責を担うアンバサダーは、大学生サポーター4人とともに東京へ派遣され、五輪のホッケー会場（大井ホッケー競技場）でのテストイベントのほか、日本ホッケー協会などの組織や取り組みを視察する予定だ。

「ambassador」と書かれたエンジ色のTシャツを、茨木市の河井豊副市長から授与された小学生たちが笑顔を見せた。アンバサダーは茨木市の広報誌が募集。五輪やホッケーへの興味や関心、そして茨木市のホストタウン事業への熱意や理解などを、子供ならではの言葉でまとめた作文を、誘致委員会が選考。応募があった30人の中から6人が選ばれたものだ。同市の福岡市長は「未来を支えていく子供たちが、スポーツと平和の祭典でもある五輪をしっかりと理解し、夏休みを利用して東京へ行き、自分自身が五輪とスポーツの知識を深めることで、茨木市により大きな躍動感が生まれることを、大いに期待しています」と説明する。

アンバサダーの彩都西小5年・鳥居櫂里（かいり）くんは「ホッケーはそれほど有名ではないけど、人気の高いスポーツにしたい」と意気込む。中条小4年の平松諒大くんも「日本ホッケー協会で仕事の内容を実際に知りたい」と意欲的だ。天王小5年・安原朱優（しゅう）くんは「オリンピックが楽しみ。選手村も見てみたい」と目を輝かせた。

ホッケーを経験した子供たちもいる。父・裕之さんが社会人野球の選手だった、東奈良小3年・福井瑚音葉（ことは）さんは「将来はホッケーのさくらジャパンに入りたい」と話す。中条小5年・金子優菜さんも「アンバサダーとしてオリンピックを盛り上げたい」といい、春日丘小4年・田中心梨（ここな）さんは「感動をくわしく皆さんに伝えたいです」と使命感に燃えている。

アンバサダーは後日、壁新聞で東京での出来事や得たものを誘致委員会に報告。茨木市内の小学校を始めとした市民への報告会も検討されている。

トークイベントに臨んだ立命大OBの日本代表選手（左から田中健、渡辺、大橋、田中世、永井）とアンバサダー

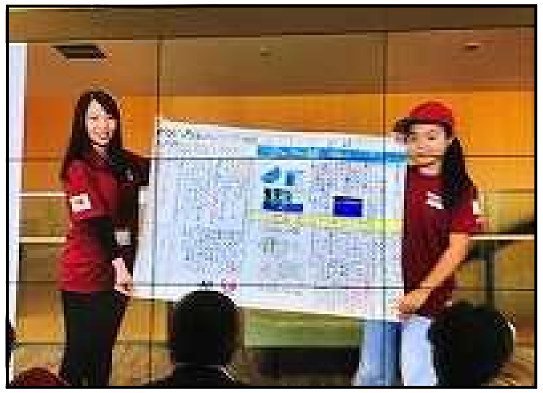
大学生サポーター	
村上　裕基	関西学院大
杉岡優貴奈	立命館大
淀谷　斉加	立命館大
桶谷　弥生	立命館大

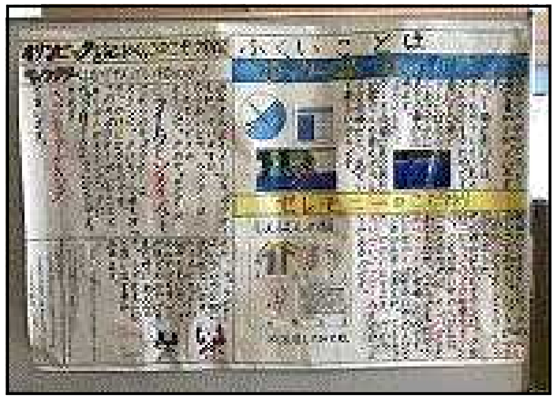
「サムライ」メダル獲得へ意欲

○…アンバサダー任命式前に、立命大OBの日本代表（サムライジャパン）5選手がトークイベントを行った。同代表に欠かせぬ存在の田中世蓮は「5人一緒に東京五輪メンバーに入りたい」と宣言。大学4年時にOICフィールドが完成した大橋雅貴も「自国での五輪開催は、しばらくないかもしれない。この機会を逃したくない」ときっぱり。アンバサダーからの質問に、全員が「メダル獲得を目指しているので、応援をお願いします」と呼びかけた。

アンバサダー視察予定

- 大井ホッケー競技場
- 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
- 日本オリンピック委員会（JOC）
- 日本ホッケー協会
- 日本テレビ
- 株式会社 明治（東京オリンピック・パラリンピック競技大会ゴールドパートナー）





新聞投書への意見

～毎日新聞より～

前号に載せた投書に対する感想意見が載っていました。

お手伝いで学んだあいさつ

中学教員 [redacted]（千葉県習志野市）

10月18日本欄「あいさつは人間関係の基本」を興味深く読んだ。私は昭和30年代に東京の下町で育ったが、当時の子供たちは家のお手伝いをよくやらされた。

朝、近所の母親たちが家の前を掃除していると「おはようございます」「いいお天気で」と必ずあいさつをかわす。私が手伝っていると「えらいねえ」とほめられ、うれしいような照れくさいような気持ちになったことをよく覚えている。

夕方には、近くの肉屋や乾物屋、豆腐屋などへお使いに行く。今のコンビニと違って「くださーい」とあいさつをして店に入り、店の人と会話をしながら買い物をした。子供ということで時々、おまけしてくれることもあった。

今考えると、お手伝いは単に実用面だけでなく、近所付き合いのあいさつやマナー、子供のしつけにも十分役立っていたように思える。今はあいさつと会話の二つが苦手な子供が増えたように思う。それどころか、近所なのにあいさつもせず素通りする大人もいて、まことに寂しい限りだ。